



AEFA アジア教育友好協会
Asian Education and Friendship Association

フレンド会報 29号

〒102-0074
東京都千代田区九段南2-3-22
アーバンセカンドビル3F
TEL:03-6265-6490
FAX:03-6265-6491

ビル名が
変わりました



2020年2月3日 発行

AEFAの3層構造理念



外の世界を見に行く

「出前授業」の新しい展開

ベトナム出張で考えた



外の世界を見に行く

ラオス・村の子ども達の遠足プロジェクト 母国の世界遺産や街の暮らしにふれる

チャンパサック県パクセーは、陸路・空路が整備され、商業も盛んなラオス南部の中核都市です。AEFAプロジェクトとして2012年に建設されたラック33小学校は、そのパクセーから約33km離れた高原の農村地帯にあります。学校のそばにはパクセーとダナン(ベトナム)をつなぐ幹線道路があり、村の子どもたちはその道路を走るバスを眺めるだけで、乗ったことは一度もありませんでした。そんな子どもたちが生まれて初めてそのバスに乗り、生まれて初めて村を出る！村中が大騒ぎとなった遠足プロジェクトがスタートしたのは、2017年のことでした。

ラオスの学校には「遠足」という行事がありません。農村の子どもたちの生活は家と学校と田畑に限られており、外の世界を体験する機会は皆無に近い状態です。村の外で遠足ができれば、子どもたちが目にしたことのない町の文化や国の歴史と発展の様子を、直に感じる機会を提供できる。学校建設の次は、子どもたちを内面から育て、未来につなげる支援をしたい。AEFA、ドナーの肥後良孝様、現地NGOであるACD (Association for Community Development)の思いがひとつと

なり、遠足プロジェクト「スタディツアー」が立ち上がりました。

準備の第一歩は親たちの同意を得ることでした。村の親たちは「町はこわいところだ！」「人さらいが出る！」「うちの子どもがさらわれる！」と大反対。親たちの大きな不安とまどいを理解・説得したのは現地NGOのACDです。親たちに代わって遠足の準備を進めました。まずは、靴。村の子どもたちは裸足で過ごしますが、町ではそうはいきません。そして、服。はぐれて迷子になることを防ぐために、目立つ色でおそろいのユニフォームを用意することになりました。

村と町との習慣の違いも理解しておかなければなりません。町のトイレ設備の使い方をはじめ、町では好きなように走り回ったり勝手にどこへでも入っていったりしてはならないこと、都会の人との挨拶の仕方や言葉遣いの違いなど、子どもたちが学んでおかなければならないことが数多くありました。そこでACDと教師たちが協力して、何度も事前学習会を実施しました。

この他、県の教育スポーツ局の協力を得て行政への申請を進めるとともに、教師、看護師、村長、村の幹部、ラオス女性連



盟、そしてACD職員からなる総勢20名の引率チームを組みました。こうして心、物、知識、行政手続、実行体制など、一年にも及ぶ準備が完了しました。

2018年3月、スタディツアーの日。ラック33小学校の生徒68人と、同校の卒業生であるラック35中学校の生徒29名が集まりました。いつも見ていたあのバスにいいよ乗るのです。引率チームを含めた約120名の冒険の始まりです。

はじめてのバスで子どもたちは次々とクルマ酔いしてしまいます。でも、パクセーでのツアーが始まればすっかり元気。訪れたのは、ワットプー寺院とプーサラオ寺院です。これらの寺院は古代遺産として有名だけでなく、重要な信仰の地でもあり、ラオスの人々が生きているうちに一度は訪れたいと願う場所です。子どもたちは2つの名所を訪れて「夢がかなった!」「世界遺産にさわったよ!」と大興奮。ACD手作りのお弁当にも大喜びでした。この日のためにACDスタッフは事務所で120人分のチャーハンを作ったのです。また、パクセー市内の有名店のアイスクリームも用意しました。村には冷蔵庫がなく、はじめて食べるアイスクリーム

でした。

スタディツアーの後、嬉しい変化がありました。参加した子どもたちは学習にとっても積極的になりました。そして、あれほどツアーに反対し、ツアー当日も心配で祈りを捧げていた親たちはというと、、、憧れの世界遺産や町の文化に触れて帰って来た子どもたちのことを、とても誇らしく思うようになったのです。その結果、スタディツアーの取組みは大きく進展しました。2019年には





ラオス最大の都市、首都ビエンチャンへのスタディツアーを実現。村からおよそ700km、三泊四日の大冒険です。

ビエンチャンでは、都最大のショッピングセンター、ラオス国立図書館、シーサケット寺院やオントウ寺院、インペン・エスニックカルチャーパークを含む計9箇所を訪れました。いつかは行ってみたいと夢見ていた首都ビエンチャン。子どもたちは夢の実現を喜ぶとともに、ラオスの歴史と伝統、豊かな文化、国際都市としての発展をその目で捉え、自国に対する誇りや、自国の将来への希望を得たようです。それが学習意欲となり、ビエンチャン大学に進学するという夢にもつながりました。

スタディツアープロジェクトはさらに進展を続けています。この一年間に、サラワン県の山岳地帯にあるパシア小学校、ポントーン小学校、ノンサー小学校でも実施しました。

はじめて訪れたパクセー国際空港で、飛行機が離陸する瞬間、思わず一緒に飛び上がってしまった子どもたち。村の外の世界を知ること、子どもたちは未来へと飛躍する翼を得ることができます。「学ぶ場所」としての学校建設に加えて、「体験から学ぶ機会」を提供するスタディツアーのような支援が農村や山村の子どもたちを支えます。

報告

金子 恵美

ビエンチャンのツアーには中学生を中心に、県や郡のスポーツ局職員も含めて計48名が参加しました。

参加した子どもたちの感想によれば、歴史ある有名な寺院やカルチャーパークを訪れて、ラオスが文化的に豊かであることを実感した・ラオス民族の多様性を知ったといえます。また、高層ビルや高速道路、たくさんのクルマ、見たこともないほど多くの書物が並ぶ図書館、多数の外国人旅行者を目にして、ラオスが国際的に発展した国であると実感したようです。一方、村の空気のほうが新鮮だと感じる子どもたちもいました。都会には樹木が少なくコンクリート建造物が多くて気温がとても高いことや、道路がいつも多くのクルマで混雑していることなど、都会の問題について考える機会になったようです。

教師たちは、スタディツアーに参加した子どもたちが例外なく学びの姿勢を変えることに嬉しい驚きを感じています。教科書の中でしか知らなかったものを実際に目にするすることで、リアルな意味が加わります。子どもたちは、自国の価値を実感することで、自分自身についても自尊心が芽生え、未来に向かって学ぶ大切さに目覚めるのではないかと思います。

〇〇小の先生方へ出前授業への思い

世界の現状について知り、自分たちにできることはないかを考えさせたい。



「出前授業」の新しい展開 ～見て、考える授業へ～

顧問 榎 尚信

〇〇市立〇〇小学校
〇年生の未来に向けてのまとめ



★出前授業申込み時に「児童・生徒に気づかせたいこと」を先生方に書いてもらっている。その内容をもとに授業を進めることで視点がはっきりしてくる。また、授業後の担任による指導の助けにもなっているようだ。特に、単発授業ではなく指導計画を組んで取り組んでいる学校では顕著である。

★谷川洋理事長がAEFAを立ち上げるきっかけとなった福井大地震。理事長の子供の頃の写真を掲げ、「ひろしくん」と呼びながら授業を進めることで、児童・生徒たちは親近感を感じる。子供の時に思ったり考えたりすることが大切だと感じる。授業の感想に「ひろしくん」と書く児童・生徒は少なくない。

★授業後に先生方に何うと、出前授業は日本とあまりにも違う生活を伝えていて、児童・生徒たちには驚きの連続であったとのこと。特に、朝起きて子供が水を川に汲みに行くのは最も信じられないことと、児童・生徒たちはとらえているようである。日本では、親が当たり前のように出してくれるが、これは、決して当たり前ではない訳である。

★ラオスの授業に国語が多いことを知らせる場面で、「くすり」を見せた。読み書きができないと、なぜ困るのかを考える機会となっている。また、日本の児童・生徒は皆、読み書きができる。小さい頃から言葉を教えてくれた親、先生などに感謝の心を持つと訴える場面となっている。

★「森のスーパーマーケット」は、日本の児童・生徒たちにとっては最もショッキングな話の一つである。日本のスーパーでは、皆が

食べやすいように誰かがしてくれているのだということを理解する。生きるため、家族のために森で食べ物を採るラオスの子供たちを、すごいと感じている児童・生徒も多い。

★ラオスの子供の手伝いで一番大変なのは何かというクイズを出した。どれか一つと言うと、ほとんどが「食べ物を採ってくる」に手を挙げた。しかし、「正解はすべて」と説明すると、児童・生徒たちは納得している。ラオスの子供の手伝いは「手伝い」ではなく、自分の「仕事」なのだとして理解できている。

★教科書が日本のように一人一冊ずつあるわけではなく、皆で大切に使用していることを知る。ある学校で、教科書を忘れてきて、「なくなった」と発言した子がいた。他の児童・生徒が「ラオスでは一人一冊ずつないんだよ」と指摘すると、次の時間にはちゃんと教科書を持ってきたとのこと。出前授業で学んだことを、自分たちの力で普段の生活に生かせることは素晴らしい。

★アジアの子供たちからの寄せ書きが入った「復興鯉のぼり」の現物を、出前授業の教室に掲げている。貧困の中にあっても、困っている人を助けようとする心の大切さを伝えている。

★「ラオスの子供たちから学んだこと」最後に『何のために学校があり、何のために学ばなければならないか』のまとめをしている。自己肯定感が低いと言われる日本の児童・生徒たちだが、どの子にも良さがある。自分の好きなこと、得意なことを大切に、ラオスの子たちと心と一緒に学んでほしい。

1948年6月28日 福井大地震



助かった命を、いつか人のために使おう

谷川 洋



朝の水くみ



「くすり」とわかるように



クイズです

- ・川へみずくみ
- ・たき木ひろい
- ・おとうとやいもうとのせわ
- ・せんたく
- ・たべものをとってくる
- ・米をつく

この中でいちばんたいへんなことはどれでしょう？



さんすうの教科書 こくこの教科書



今度は私たちの番！

復興鯉のぼり



学校建設プロジェクト

2019年12月現在



① ナンリー小 サッカーコートに芝をはる村の人々



② グエンチーミンカイ小 完成



③ ララ小 完成



④ ナコック小 村人手作りの遊具



⑤ ハーコーナム中 増設



⑥ キムソン分校 着工式の様子



⑦ ゴイカイ分校 山を5m削り敷地を準備



⑧ メーバン小 高床式校舎着工時



⑨ ガハイ分校 古い木造校舎



⑩ パヌアン小 現在の校舎



⑪ カダップ小 古い木造校舎



⑫ タンビヤワ ダルマパーラ小 ブロック積みの仮校舎

	国名	学校名 支援者（敬称略）	ひとこと
完成	ベトナム	ナンリー小学校 株式会社ディアーズ・ブレイン + 沖縄ワタベウエディング株式会社	新校舎とサッカーコートを建設。今後1年間、プロのコーチを招き、生徒へのサッカー指導を行います。12月の開校式での日本の支援者と生徒との交流が、地元テレビで放映されました。 写真①
	ベトナム	グエンチーミンカイ小学校 アセアンスマイルスクールプロジェクト	アセアンスマイルスクールプロジェクトの支援がきっかけとなり、政府からの幼稚園建設支援が決定。小学校の隣に幼稚園ができて、地域の教育環境がより向上しています。 写真②
	ラオス	ララ小学校 WANG基金 藤原和博 株式会社にしのあきひろ	2020年2月に開校式を迎えます。ララ小学校の新校舎は、ベージュにブラウンのラインが効いたオリジナルカラーです。 写真③
	ラオス	ナコック小学校 小川栄二 スポーツコート支援：株式会社ブロードウェイ	「校舎」と「スポーツコート」のご支援をきっかけに、村人たちがブランコやシーソーなど遊具を手作りして子供たちにプレゼントしました。学びと運動、そして遊びも大変充実しています。 写真④
	ラオス	ハーコーナム中学校 川邊恵美	9月に発生した洪水の被害が心配されましたが、村も学校も無事でした。地域のより多くの中学生が学ぶことができるようになりました。 写真⑤
	ラオス	プーバチアン中学校 エルセラーン1%クラブ	バチアン郡の象徴でもあるバチアン山のふもとにあります。児童生徒総数872名（2018-2019）という地域の中心基幹校です。
	ラオス	ピエンサイ小学校 エルセラーン1%クラブ	
	ラオス	カトウア中学校 石塚勝巳、匿名希望	地域から生徒が集まる中学校で、村人たちも子供たちのために校庭を整備したり学校のために協力しています。2020年2月に開校式を迎えます。
建設中	ベトナム	デオムン分校 大野美之	2020年3月の開校を目指して工事中。トイレは、2つの小学校の生徒募金（福井県平草小+町田市南大谷小）と紀尾井町ロータリークラブ、西脇様、リアンコーポレーション様のご寄付で作ります。
	ベトナム	キムソン分校 大阪府立柏原東高等学校同窓会	2020年度末に開校する柏原東高校同窓会が、卒業生の思いを形に残したいとベトナムに新校舎建設を支援。2020年3月の開校式に向けて、建設が進んでいます。 写真⑥
	ベトナム	イエンニン分校 一家恵理	2020年3月の開校式を目指して工事中。開校式では、ベトナムの歌と一緒に歌ったり子供たちとの交流もとても楽しみにされています。
	ベトナム	ゴイカイ分校 株式会社カナオカ	2020年11月の開校式を目指して工事中。途中からバイクに乗り換えたり着く山の中腹にあり、山を切り崩し整地し学校を建設します。3つの山の尾根を超えて通学する生徒もいます。 写真⑦
	ベトナム	スアンバン小学校 一般社団法人 ゼブラ社会貢献支援協会	アンラック分校の古い木造校舎を新たに建て直し、学習環境を整備するほか、本校に「レインボーライブラリー」を建設。スアンバン校区の子供たちが読書の楽しさを知る活動を1年間支援。
	ベトナム	カンバオ分校 エルセラーン1%クラブ	
	ベトナム	バンバン分校 エルセラーン1%クラブ	ベトナム政府へ建設許可を申請中。バンバン分校は、AEFA視察後に老朽校舎が嵐で倒壊。現在は、民家の床下で授業を行っており、1日も早い新校舎の建設が待たれています。
	ベトナム	モニュー分校 水野恵子	2020年の開校式を目指して工事中。
	タイ	メーバン小学校 チュラコス株式会社	2020年1月に開校式を迎えます。高低差のある土地の特性を活用した高床式の校舎です。 写真⑧
	ラオス	ファイルーシ小学校 WANG基金 藤原和博	2015年度建設プロジェクトの増設。同校は、学業成績優秀、サッカー大会でも優勝するなど文武両道で、地域のモデル校に育っています。
スリランカ	イハラタルドゥワ小学校 エルセラーン1%クラブ		
スリランカ	ポーサレー小学校 エルセラーン1%クラブ	2020年1月には、全ての工事が完了、新校舎が完成する予定です。	
スリランカ	アットダットカッタ・ラフラ小中校 七村守	民族紛争時、反政府勢力の支配地域に近接しており、いわゆる「ボーダー ビレッジ」と呼ばれていました。約30年間、危険と恐怖の中がありました。	
計画	ベトナム	バンファ分校	子供たちは、山間に散在する集落から時間をかけて山道を歩いて通学します。児童数は239人、2004年建設の校舎1棟があるものの、教室不足のためトタンと木で建てた仮設校舎で学ぶ子供も。
	ベトナム	ガハイ分校	モン族の村。道路状況が悪く、バイクや徒歩によるアクセスとなる。仮設校舎は老朽化しており、雨風や暑さ・寒さをしのぐことができないばかりか、危険。 写真⑨
	ベトナム	コンミン分校	2棟ある校舎のうち、老朽化した木造校舎は、ビニルシートで穴をふさいで使用している状況です。トイレも古く衛生的ではありません。
	ラオス	バヌアン小学校	2棟の小学校舎は老朽化が進むばかりか、教室不足のため複式で授業が行われています。村人たちが木材を集めたり、学校用地を拡張するために土地を確保するなど準備を進めています。 写真⑩
	ラオス	カダップ小学校	20年前に村人が手作りした校舎2棟は老朽化が進み、修理しながら使用しています。 写真⑪
	ラオス	マイバンマセル中高校 増設	2018年度、新たな土地を生徒たちが造成、新校舎（4室）と寮が完成しました。教室不足を補うため、寮を昼間は教室として使うほか、古い木材を活用して仮設校舎を建てるなどしています。
	ラオス	クアセット中学校 新設	地域の村の子供たちが通う中学校ですが、現在は村人が建てた仮設校舎で授業が行われています。校舎ができれば、地元で義務教育である中学校を修了できるようになります。
	スリランカ	タンピヤワ ダルマバーラ小学校	政府が全国の小中一貫校から1000校を選び、小学校を分離する政策を進めています。同校は2016年に分離したものの、3年経っても十分な校舎がなくブロック積の仮設校舎で学んでいます。 写真⑫
スリランカ	ドゥヌマダラーワ小中校	1937年創立。貧困状態の保護者が多いですが、学校行事に積極的に参加するなど教育への関心は高く、地域でも優秀な成績を誇る学校です。教室数が不足しています。	

視察の意味と現場主義

ベトナム・イエンバイ省の現地視察から考えたこと

田中 富美子

私は2018年4月から、AEFAのベトナムの学校建設プロジェクトを担当しています。その間約1年半、支援地域や学校をどのような視点や考え方で見出すのが良いのか、日本のNPOが経済発展の著しいベトナムで少数民族への教育支援を継続する意味について考えてきました。当初は、谷川理事長が選定した地域や学校を、開校式や現地視察の折に訪れ、「なぜここなのか」と考えるところからスタートしました。加えて、ベトナムの53の少数民族の歴史的経緯、生活実態データやレポートの調査、国際機関の支援の歴史などの勉強、さらに現地のNGOが現場で体感している実情を聞かせてもらうことを続けました。1年半を経て、国の経済発展の一方で、少数民族が貧しい暮らしを脱するには課題が多いこと、特に大きな制約として少数民族が住む地域の教育環境に課題が多いことを知りました。一方で経済的な困難や恵まれない環境にも関わらず、学校現場を支える人々の真摯な心、人々の教育への希望とあこがれを実感し、なぜそれらの地域をAEFAが支援しているのかを少しずつ理解できてきたように感じています。

このような折に、北部のイエンバイ省を視察する機会を得ました。背景としては、現在支援の中心となっている北部2省の教育環境整備が順調に進み、支援の必要度が高いさらに北の山岳地域の支援を検討する時期との判断がありました。AEFAは過去にも、地域の発展などを鑑み支援地域を中部・南部から北部へシフトしています。今回の視察は、AEFAの今後の方向性に関わるものでもあり、現地パートナーNGOが同行するとはいえ、初めて一人での視察であり、緊張しつつ日本を出発しました。

10月21日、昼過ぎにハノイの空港で現地NGOと合流、NGOの車でイエンバイ市に向かい、市内で3日間の視察に同行する省の教育訓練局(DOET)の副局長Mr.Kienをピックアップし、視察拠点のギアロー町に向かいました。空港からイエンバイ市までは道路が整備されていましたが、ギアロー町へ向かう道は山脈を横断する蛇のように曲がりくねり未舗装が残る道で、山間部に立ち入ることを実感しました。

今回の視察では、イエンバイ省および各郡の教育訓練局関係者、学校関係者、現地NGOの支援を得て、山岳地域での少数民族の学校を訪れ、現地で急速に進むさまざまな変化を聞き取りました。訪問したのは、省西部のギアロー町を拠点にムーカンチャイ郡の2校、ヴァンチャン郡の5校、チャムタウ郡の2校の計9校です。これら地域では、山並みが連なる中に溪谷が開け、峡谷沿いや山間部に、モン族、ザオ族、タイ族などが米作、雑穀やお茶の栽培、家畜を飼育し暮らしています。

10月22日は、ムーカンチャイ郡の2校(リムモン分校、カオファ小中一貫校)、ヴァンチャン郡の2校(バンファ分校、ナムラン民族小中一貫デイスクール)の計4校を訪問しました。それぞれの学校へ向かう道筋の集落はまばらで規模は小さく(5~10軒)家屋は伝統的な造りで、民族衣装の人々が自分たちで家を建てる姿も見かけました。溪谷沿いには棚田が開かれ、傾斜地には茶畑がちらほら見受けられましたが、未耕作の森林が大部分を占める山中を移動しました。最初に訪問したリムモン分校は、2011年にAEFAが支援し建設した小学校の分校でしたが、省の教育方針の変化により2016年に小学校の分校が本校に統合さ



山の中に点在する家と棚田



読書する子どもたち



家をつくるモン族の人たち



標高 1600mにある学校



体操する子どもたち



モン族の先生によるモン語の授業



給食を待つ子どもたち

視察スケジュール 2019年10月

- 21日(月) 東京→ハノイ→ギアロー泊
- 22日(火) ギアロー→ムーカンチャイ郡→ヴァンチャン郡→ギアロー泊
- 23日(水) ギアロー→ヴァンチャン郡→ギアロー泊
- 24日(木) ギアロー→チャムタウ郡→ヴァンチャン郡→イエンバイ市→ハノイ泊
- 25日(金) ハノイ泊
- 26日(土) ハノイ→東京

れる流れの中で、幼稚園に転換、93名の子供が通う幼稚園として大切に使われていることを確認しました。

10月23日は、ヴァンチャン郡の3校(ガハイ分校、サンドウ民族小中一貫デイスクール、バンヘオ分校)を訪問しました。最初に訪れたガハイ分校はギアロー町から車で1時間弱移動後に、バイクに乗り換え約1時間の山腹のモン族の村の小学校分校です。ここで学ぶ100人弱の子どもたちは裸足またはサンダル履きで体も服も汚れており、体格も小柄で、厳しい暮らしが伺えました。トタンと木で作られた古い教室は隙間だらけでしたが、先生の熱心な授業と真剣に勉強する生徒が印象的でした。その後、本校のサンドウ校へバイクで向かい、本校を訪問後に校長先生の自宅で奥さんの手作り料理の昼食を頂き、バイクで山道を下りました。校長先生の自宅は高床式の伝統的な造りで、道路に面した1階の床下に椅子が置かれ、村人が立ち寄りお茶を飲みながら話し込む姿を見かけました。

10月24日は、チャムタウ郡の少数民族のためのデイスクールと呼ばれる寄宿制の小中一貫校2校を訪問しました。これらは標高の高い山岳地域(800~1600メートル)に住むモン族向けの民族学校です。それぞれ指導方法に工夫を凝らし、民族語教育や環境学習など、意欲的な取り組みがされていました。その一方で、山間部の狭隘な土地に、大規模な学校を建設する資金が乏しく、生徒たちは粗末な仮設教室と寄宿舎に詰め込まれているように感じました。食堂での給食も見ましたが、栄養状態が良くないためか、日本の子どもたちより小さく幼く感じられる低学年の子どもたちが、家族と離れて集団生活を送っている様

子に心が痛みました。寒くなり始めた時期で、咳をしている子どもたち、熱を出して寄宿舎で一人寝ている子どもを見ました。

近年、ベトナム全体の教育環境の改善は著しく、外国の援助も得て小学校の分校を整備することで小学校に通えない子どもたちの数は激減し、中等教育以上への進学率向上、教育の質の向上が次の目標となっています。

今回視察したイエンバイ省の少数民族の教育環境も変化していました。分校が廃止され本校へ統合され、山間部の広い地域に散在して暮らす少数民族向けには、月~金は寄宿制の小中一貫校の設立が推進されていました。この集約化により教育の質が改善される一方で、若い子どもの寄宿生活という犠牲が払われていました。また、貧しい少数民族向けの民族学校へ政府資金が行き届かず、粗末な仮設の校舎や寄宿舎、生徒数に対し教室やベッドやトイレの数の不足が散見されました。

生活の面では、かなり山奥まで電気が通じるようになっていました。また、山間部の伝統的な造作の家にもテレビのアンテナが立ち、バイクや車で通行できるように道路の整備が進みつつあるのを見ました。携帯電話の電波受信は山間部でも可能で、学校の先生たちは携帯電話とバイクを所有していました。

これらの事象から、少数民族も伝統的なライフスタイルからベトナム社会への同化が進む様子を知ったと同時に、耕作地が少なく産業も無い山間部の奥地に住む少数民族の暮らしの厳しさも窺えました。

今回の視察で捉えた現地の教育や生活環境の変化を踏まえ、現地NGOと共に今後の支援について考えていきます。

ラオスの「ARASHO」

東京都立荒川商業高等学校同窓会による 学校建設支援プロジェクト

2019年10月31日 東京新聞
2019年11月5日 中日新聞
2019年11月29日 朝日新聞 東京版
2019年12月20日 足立よみうり新聞

報道

1935年設立の東京都立荒川商業高校(足立区小台)は、2022年3月に閉校します。

「勉強だけでなく、学校で過ごす時間がとても楽しかった」「教育を受けられたおかげで、今の自分がある」・・・「学校へ行く」楽しさや学ぶことで世界が広がることを、未だ学習環境が十分でない世界の子どもに知ってほしいと、同窓会「桐門会」が約2万人の卒業生の思いを代表し、ラオスに中高校をプレゼントしました。

マイバンマセル中高校(注:ラオスの中等教育は、前期(日本の中学校に相当)4年間、後期(高校に相当)3年間)は、地域の中心校です。支援が決まり学校プロジェクトが始まると、先生・生徒・地域の方々が協力して学校用地を整地したり、柵を作るなど協力。2019年4月、4室の鉄筋レンガ造りの校舎、水タンク、トイレが完成しました。

マイバンマセル中高校にARASHO(愛称)が引き継がれ、11月14日開校式が行われ、「桐門会」会長安澤富士子さん、副会長加納正子さん、元校長(第18代校長)森田聖一先生が臨席されました。郡の副知事から、「マイバンマセル中高校発展のためのプロジェク



マイバンマセル中高校 (ラオス南部チャンパサック県)

トは、アイデアとプロセスにおいてとても新しいものとなりました。というのは、地域の各セクターが協働し、村人が労働力やお金を出し合ったり、大きく貢献したことです。そして、生徒のみなさんにお伝えしたい。村の未来をつくることができるのは、唯一、みなさんなのです。学校は、未来を創る場所です。」とメッセージが寄せられました。

第8回 Talk DongDu (トーク・ドンズー)

AEFA 理事長がゲスト登壇 若者たちにエール

登壇

10月20日(日)、川崎にて「トーク・ドンズー」イベントが開催され、AEFA理事長の谷川が講演を行いました。

このイベントは、ベトナムのドンズー日本語学校を卒業して日本にやってきた留学生とそのOB/OGによる「ドンズー留学生会(Talk DongDu)」が主催。8回目を迎える今年はイベント全体が日本語のみで進められました。2009年期生で日本の大手建設会社勤務のマイ・スアン・カンさんが司会を務め、講演とフリートークの二部制で、理事長がAEFA設立に至るまでの道と理念を語るとともに、若者たちに向けて熱いエールを送りました。

講演のタイトルは【若者よ、必死に +αプラスアルファ】。若い頃は仕事や勉強などの「本題」に必死。それでも他人を想う心

の余裕や、新しい何かに挑戦する気持ち=「プラスアルファ」が必要だ、という意味が込められています。「失敗を恐れずに「情熱こそ大きな成果を生む」という自身の経験に基づくスピーチに、会場からは大きな拍手が贈られました。

ドンズー日本語学校とAEFAの関わりは深く、卒業生による学校建設事業への参画や新規プロジェクトの立ち上げなど、ベトナムの民間資金で現地への支援が実現するケースが生まれ始めています。そうしたプロジェクトの一例を紹介した2013年期生レ・ゴック・バオ・ヴィさんは、「日本からの支援を当たり前と思わず、与えられた機会をどう活かすか。そこからどう行動するかがベトナム人の課題」と語りました。

共催:川崎区役所、グローバル文化協働支援センター・KAWASAKI GLOBAL COMMUNITY(KGC)



メディアに登場

NHK Eテレ

『あしたも晴れ! 人生レシピ』

放送日 2019年9月13日(金) 午後8時~8時45分
再放送 2019年9月20日(金) 午前11時~11時45分

「これからどんな人生を歩んでいきたいのか」と問い始める50代以降の人たちを応援し、生活を豊かにするヒントを届けるNHK教育テレビ(Eテレ)の情報番組『あしたも晴れ! 人生レシピ』に、理事長が出演しました。

放送回のタイトルは「第二の人生 ボランティアで豊かに」。総合商社を定年退職後、アジアに学校を建てるNPOを創出したケースとして紹介。

福井地震で一命を取りとめ「将来は人のために」と誓った幼少期からの想い、商社勤務時代と第二の人生をスタートさせるきっかけになった家族のこと、事務局や自宅での様子、ラオス・ベトナムなど現地の人々との交流や建設校に通う子どもたちの様子などが詳しく取り上げられました。

公益財団法人 海外子女教育振興財団

『月刊 海外子女教育』 2019年12月号

海外子女教育振興財団の機関誌『月刊海外子女教育』2019年12月号に、理事長のインタビュー記事が掲載されました。

同財団は、海外に住む日本人の子ども達や帰国子女の教育支援事業をおこなう公益財団法人で、月刊の機関誌では教育やそれにかかわる様々なテーマの記事を掲載。巻頭ページの『顔』では、広い視野を持って国内外で活躍する人を毎月紹介しています。

かつては商社マンとして「海外子女教育」の当事者でもあった理事長は、自らの半生を振り返りつつ、AEFAの活動の成り立ちや意義を詳しく紹介。今まさに海外で子育て奮闘中の若い世代に向けて、人生の先輩としてメッセージを送りました。



リレートーク Why AEFA?

横江 友則 →→→ 菊岡 信義

株式会社菊岡夫婦社 代表、AEFA 関西支部長

大手旅行代理店等での勤務を経て、株式会社菊岡夫婦社を設立。起業のきっかけは、夫妻で世界中を旅する中で、社会の理不尽さを目の当たりにしたこと。アジアの子供たちに小学校をプレゼントして、夢を叶えてほしい・・・という強い思いから、仲間と共に本気の活動を続けている。



私達夫妻とAEFAとの出会いは6年前にさかのぼります。

アジアの子供達に小学校をプレゼントしたいという相棒との思いから、その夢をお手伝いいただける団体を探しはじめ、やっとの思いでAEFAに出会いました。その後、谷川理事長にわざわざ京都までご訪問頂きお話をさせて頂いたのを、ついこないだのように感じます。

私達は10年前に学校建設の夢の実現をライフワークに定め、その資金作りの為に相棒は飲食店を起業し、たまたま運よく店舗を少しづつ増やすことが出来ています。途中から私も相棒のカバン持ちをはじめ、今では(株)菊岡夫婦社という会社を二人で営んでいます。

夢の学校建設の方は、AEFAのサポートの元、ラオスのサラワン県に小学校を2校プレゼントすることが出来ました。

ご来店頂くたくさんのお客様のお気持ちが学校という形になっていきます。有難い商売です。次の3校目を目指し夢を共有するフランチャイズ会社社長共々、日夜頑張っております。日頃、フツとしたときにラオスの子供たちを思い出し元気もらっています。

昨年からはAEFA関西支部長として関西のドナー様のサポート、関西のボランティアスタッフの連絡係などお手伝いをさせて頂いています。これからもゆっくり、少しずつ夢の実現に向けて歩んでまいりますと共に、AEFA活動のお手伝いをさせて頂けましたら幸いです。今後共宜しくお願い致します。

次のバトン: 木村 達也さん (AEFA顧問)

AEFA往来 2019.7~2020.1



7月16~21日	タイ出張	メーバン小建設地視察、農業プロジェクト、建設既存校視察(谷川・溝辺)		理事長、ラオス教育スポーツ副大臣よりラオス政府を代表し感謝状を授与される。	
9月22~25日	ベトナム出張	ゴックタン小開校式、キムソン小建設地視察(谷川・亀井・菊岡)	20~23日	ベトナム出張	グエンチーミンカイ小開校式、建設既存校視察(金子)
10月1日	服部駒子、事務局入局		12月3~7日	ベトナム出張	ナンリー小開校式、ゴイカイ小視察(亀井・田中)
6~9日	沖縄出張(谷川)		13日	第44回理事会	
20日	第8回トークドズー	谷川、スピーカーとして参加	20~25日	ベトナム出張	チャーレン小・チャラン中視察(金子)
20~26日	ベトナム・イエンバイ省視察出張(田中)		2020年		
24日	定例会		1月27~30日	ラオス	ドンニヤイ中高生来日 福島県飯館村訪問
11月8~10日	福井出張	退職女性校長会福井支部で講演(谷川)			
12~22日	ラオス出張	マイバンマセル中高、ホーコンナイ小開校式、建設既存校視察(谷川、金子)			



ラオスの小学校にて現地NGOスタッフが交流作品紹介

タイ農業プロジェクト はちみつ採集の様子

令和2年、新たな年が始まった。

本年も、どうぞよろしくお願ひいたします。

事業年度15年の去年、ついにAEFA建設校が300校を超えた。

各国のプロジェクト背景はそれぞれであるが、建設した学校が様々な形で地域の核となり、教育への意識を変え、子どもの成長に役立っているという知らせを耳にすることも多い。嬉しいニュースを聞く度、一緒に活動を推進してきたパートナーNGOや仲間たちの笑顔が、感謝の念と共に思い浮かぶ。



ラオス郡の教育局員や先生方と一緒に

その一方で「これから」が、建てて終わらないAEFAの正念場、との思いが深まっている。これまでも、奨学金や少数民族出身の教員育成、読書活動等現地のニーズに即したプロジェクトを継続してきた。

今年も、「これから」つまり「地域と人の成長」に寄与すべく新たな挑戦をしている。その一つが、タイ北部山岳部における農業プロジェクトだ。学校から巣立った青年らが中心となり、換金作物から脱却、気候変動に順応する持続可能な農産品を創出。地域同士をつなぐゆるやかなネットワークをつくり、ともに成長するための活動を支援する。

その他、ラオスで学校を主体とした環境啓蒙活動やベトナムでの現地参加型・主導型の建設プロジェクトなど、「これから」へ挑戦する。新たなワクワクする扉を一緒に開いていく、仲間の力の結集を期待している。

300校を超えて……beyond 300
Tanikawa's Notebook 理事長・谷川洋



手と挨拶

服部 駒子

2019年10月入局

東南アジアに8年暮らし、2019年に帰国しました。マレーシアでミャンマーからの難民の子どもたちに出会い、英語を教えるボランティアを通じて難民の方々との交流を深めました。日本を含むアジアの子どもたちと一緒に、より良い未来をつくっていきたいです。



私たちは各国のパートナーNGOと手を携えて活動しています。



ベトナム: Viet-Nam Assistance for the Handicapped (VNAH) / Saigon Children's Charity (SCC) / Research and Communication Centre for Sustainable Development (CSD)
ラオス: Association for Community Development (ACD)
タイ: Raks Thai Foundation (Care Thailand)

